

トマト 葉かび病について



図1 葉裏に形成された病斑

図2 葉かび病菌の分生子



図3 葉かび病(実線内)とすすかび病(破線内)

図4 多発ほ場

1 生態

トマト葉かび病は糸状菌である *Passalora fulva*(Cooke)U. Braun & Crous によって発病する。本菌はトマトだけを侵す。

本病は主として葉に発生する。葉では初め退色～白色の円形病斑が形成され、その後拡大し、葉裏に灰黄色～灰褐色のピロード状のかびが密生する。本病はトマトすすかび病と病徴が酷似する。葉かび病とすすかび病が混発することもあるが、肉眼での判別は困難で、光学顕微鏡による確認が必要である。

発病は最初、株の中～下位に発生する。潜在感染期間が約2週間あり、感染から二次伝染源となる胞子形成までにある程度の期間が必要であるが、胞子形成開始後は大量に胞子が形成されるため、圃場内の風の流れに沿って急速に伝染が広がる。このため、各圃場内では風上に位置する地点から拡大することが多い。株内では下位葉から上位葉に進展し、病勢が激しい場合は枯死することがある。

抵抗性遺伝子を持つ品種が市販されており、病原菌の打破レースが出ていない抵抗性遺伝子を持つ品種を用いれば発生しないが、近年複数の抵抗性遺伝子を打破するレースも認められている。

2 発生状況

気温が20～25℃で多湿時に発生しやすい。15℃以下の低温や30℃以上の高温では病勢は抑制される。夏秋雨よけ栽培地域では、梅雨期に初発が認められ、梅雨明け後の高温期はやや抑制されるが、9月以降は好適な条件となる。

本県では、トマト葉かび病対策として *cf-9* 抵抗性を有する品種が導入されており、本病の発生は以前より減少している。しかし、平成21年頃から *cf-9* 抵抗性品種に本病の発生が認められている。

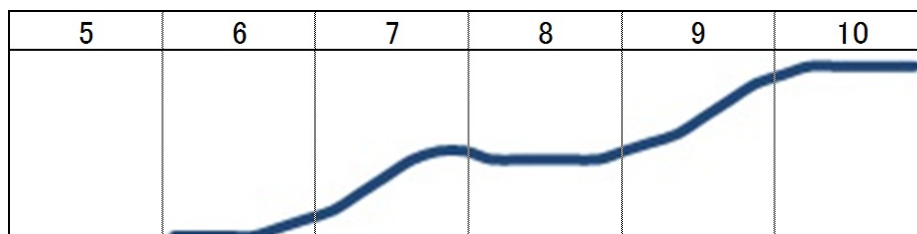


図5 夏秋雨よけ栽培での発消長

3 防除対策

(1) 抵抗性品種の利用

抵抗性遺伝子を持つ品種を作付する。

(2) 樹勢低下の防止

本病は肥料切れした場合に発生しやすいため、肥培管理に注意し、樹勢維持に努める。

(3) 薬剤による防除

本病が蔓延すると防除困難になるため、予防的な防除を重点に行う。病斑は主に葉裏に形成されるため、葉裏に薬液が十分にかかるよう散布を行う。発病を確認した場合は、治療効果が高い薬剤で進行を止める。

なお、県内では、数種の殺菌剤に対して単独または複合的に耐性を有する葉かび病菌が確認されているため、耐性菌が確認された圃場では、該当する殺菌剤（同一系統を含む）の使用を中止する。なお、耐性菌未確認の圃場においても薬剤の感受性低下を防ぐため、同一または同系統薬剤の連用は避ける。

(4) 残渣の処理

植物残渣は、圃場外へ持ち出し、適切に処分する。